# 令和5年度全国学力・学習状況調査　結果概要

## １　調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、

〇全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析することによって、国や全ての教育委員会における教育施策の成果と課題を分析し、その改善を図る

〇学校における個々の児童生徒への教育指導や学習状況の改善・充実等に役立てる

〇そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

## ２　調査実施日

令和5年4月18日（火）

## ３　調査対象

小学校第6学年：1，　504名　　中学校第3学年：1，　319名　　（実施児童生徒割合）

| 本市の実施状況 | 実施校数 | 当日実施した児童生徒数 ※ | | |
|---|---|---|---|---|
| | | 国語 | 算数・数学 | 英語 |
| 小学校 | 16校 | 1，　476名（98，1%） | 1，　477名（98，2%） | |
| 中学校 | 7校 | 1，　270名（96，2%） | 1，　270名（96，2%） | 1，　269名（96，2%） |

※ 後日実施した児童生徒の結果は集計値に含まれません。

## ４　調査内容

**（1）教科に関する調査　国語、算数・数学、英語**

・学習指導要領で育成を目指す、知識及び技能や思考力、判断力、表現力等を問う問題を出題。

・各大問において「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善のメッセージを発信。

※中学校で4年ぶり2度目となる英語の教科調査を実施。

**（2）生活習慣や学校環境等に関する質問紙調査**

・児童生徒に対する調査

（学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関すること）

・学校に対する調査

（学校における指導方法に関する取組や学校における人的・物的な教育条件の整備の状況等に関すること）

※質問紙調査について、学校質問紙は全ての学校で、児童生徒質問紙は約80万人を対象として、オンライン方式により実施。

（本市では、希望した小学校5校、中学校2校がオンラインで実施）

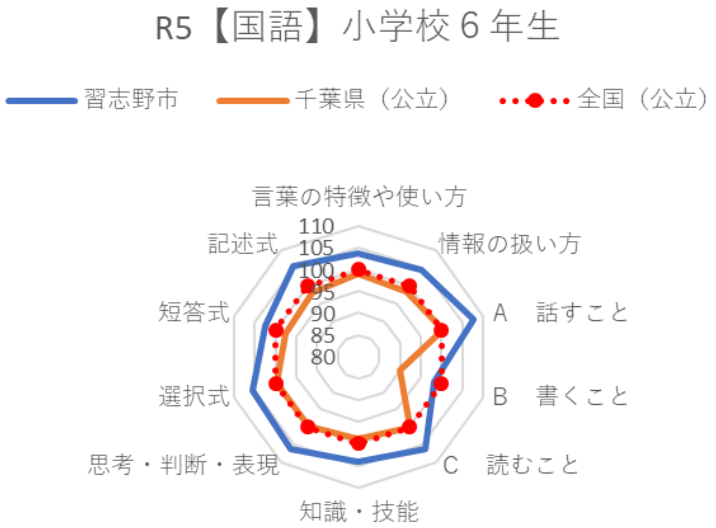
## ５ 教科に関する調査の結果

### （1）小学校・国語

**① 正答率**

| | 習志野市（%） | 千葉県（%） | 全国（%） | 全国差（%） | 全国1位県（%） |
|---|---|---|---|---|---|
| R5 国語 | 71 | 67 | 67．2 | 3．8 | 72 |
| R4 国語 | 71 | 66 | 65．6 | 5．4 | 71 |
| R3 国語 | 70 | 65 | 64．7 | 5．3 | 71 |
| R2 国語 | | 感染症拡大のため未実施 | | | |
| R1 国語 | 66 | 63 | 63．8 | 2．2 | 74 |

**②学習指導要領の内容の平均正答率の状況**




**全国平均を 100 としたときのグラフ（R5 年度）**

**③ 成果と課題、今後の取組**

**成果**①目的を意識しながら、文章全体の内容を把握し、中心となる語を選んで要約することの正答率が９３％であり、全国平均も３ポイント上回っている。要約する内容は、目的に応じて異なるということを理解することが比較的できている点である。

②文章の種類とその特徴を捉えることの正答率は８３．６％であり、全国平均も４ポイント上回っている。推薦する文章、提案する文章、説明する文章、主張する文章など、それぞれの文種の特徴についておおよそ理解ができていると考えられる。

③全設問の無解答率が、全国平均を下回っており、問題に意欲的に取り組もうとする姿勢がうかがえる。

**課題**①複数の文章を関係付けて捉え、図表を用いて書く設問の正答率が２６．２％であった。全国平均も唯一下回り、大きな課題である。一つの文章だけでなく、複数の文章を比較したり、対照したりしながら関係付けて読んだり、図表などを用いて書いたりすることが課題のある点である。

②現行の学習指導要領になって整理された「情報の扱い方に関する事項」についての設問２つの正答率は、どちらも全国平均は上回っているものの、６０％台であった。文や文章に含まれている情報の扱い方を身に付けていくことに課題がみられた。

③敬語の使い方について、全国平均は上回っているものの正答率は６３．２％であっ

た。相手や場面に応じた適切な敬語の使い方を身に付けていくことに課題がある。

**今後の取組**

**【複数の文や文章、資料を関係付けて読んだり書いたりすることに取り組む】**

①文章を読んだり書いたりする際に、一つの情報だけではなく、複数の文や文章を関係付けて読んで理解し、表現する学習を意図的に設定する。その際、読む目的や書く目的を明確にし、複数の叙述を結び付けて読み、どの叙述からどのように考えたのかを具体的に伝えたり、複数の情報を根拠に挙げ、分かる事実と自分の考えを書いたりする活動を取り入れるようにする。

②図表やグラフのデータと文章との関係を具体的に捉え、活用する学習を取り入れる。その際、図表やグラフのデータが示す情報は何か、文章のどの叙述と、どのように関連するのかを正確に捉えるために、複数の語句を丸や四角で囲んだり、語句と語句を線でつないで図示したりするなど、情報の整理の仕方を具体的に指導していくようにする。

**【文章を読んで正確に理解すること、デジタルで多くの文章を読むことに取り組む】**

③問題文の正確な読み取りを意識させ、「すべての教科で教科書をしっかり読ませる」ことに取り組むようにする。

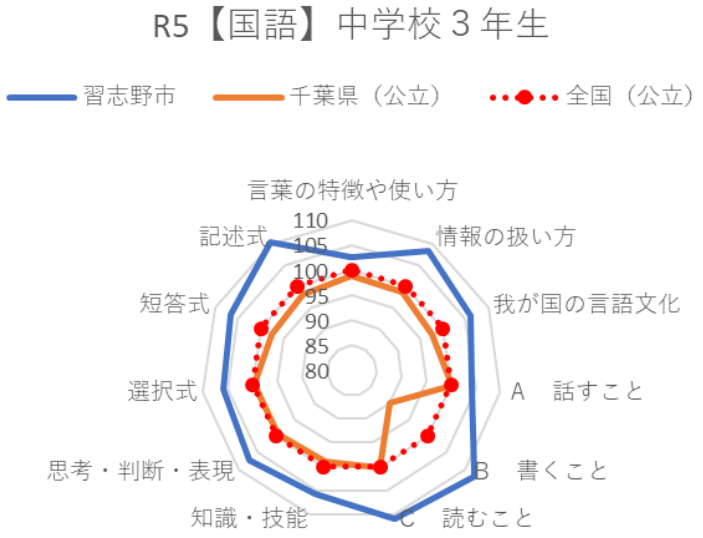
④令和６年度以降実施する MEXCBT や、全国学力・学習状況調査の CBT 化に対応するため、「タブレット端末上のデジタルでの文章読み書き」を授業時間の中に意図的に設定することで、タブレット端末の有効活用を通して、デジタルリテラシーの向上を図っていくようにする。その際「ナラシド　ライブラリー」の積極的な活用を促す。

**（2）中学校・国語**

**①　正答率**

| | 習志野市（%） | 千葉県（%） | 全国（%） | 全国差（%） | 全国1位県（%） |
|---|---|---|---|---|---|
| R5 国語 | 75 | 69 | 69．8 | 5．2 | 74 |
| R4 国語 | 71 | 68 | 69．0 | 2．0 | 73 |
| R3 国語 | 67 | 65 | 64．6 | 2．4 | 71 |
| R2 国語 | | 感染症拡大のため未実施 | | | |
| R1 国語 | 75 | 72 | 72．8 | 2．2 | 72 |

**②学習指導要領の内容の平均正答率の状況**




**全国平均を 100 としたときのグラフ（R5 年度）**

**② 成果と課題、今後の取組**

**成果**①問題別の正答率で、説明的な文章の要旨を捉える設問が、８０．９％であり、全国平均も６ポイント以上、上回っている。説明的な文章の特徴を踏まえ、その理解が恣意的にならないように読むことは、比較的できている点である。

②インタビューの内容を受けて、自分の考えを話すことの設問、図を基にして根拠を明確にして自分の考えを書く設問は、どちらも記述式の問題であったが、正答率は８０％を超え、全国平均も６～８ポイント程度上回った。「話すこと・聞くこと」においても「書くこと」においても、自分の考えを表現することについては比較的できている点であると考えられる。

③全ての設問の無回答率は、全国平均を下回った。特に、記述式問題の無回答率は、全国平均を大きく下回っており、「書く」ということに対して抵抗感なく、主体的に取り組もうとする姿勢がうかがえる。

**課題**①「文脈に即して漢字を正しく書くことができるかどうかをみる設問が最も正答率が低く、４５．２％であった。(「推し量って」の漢字）中学校において、漢字の意味を理解して正しく書くことの定着は、積年の課題であり解消されていない。

②観点を明確にして二つの文章を比べて読み、表現の効果を説明する設問の正答率は、６９．０％であった。複数の文章を、目的に沿って読み、表現方法の特徴を理解したり、共通点に気付いたりすることが課題のある点である。

③古典の原文を、現代語訳や現代語で書かれた文章と比べて読み、表現の効果について考える設問の正答率は、５９．６％であった。②と同様、古典作品についても複数の文章を比較しながら読むこと、表現の効果に気付くことに課題が見られた。

**今後の取組**

**【観点を明確にして、複数の文章を比較しながら読むことに取り組む】**

①教科書等の一つの文章を読んで理解するだけではなく、複数の文章を比較しながら読む学習場面を意図的に設定するようにする。その際、要旨や論の展開といった文章の内容面を比較しながら読んだり、構成や表現の効果といった文章の書かれ方の共通点を捉えながら読んだりするなど、観点に沿って読む活動を取り入れていくようにする。

②古典作品については、原文のみならず、分かりやすい現代語訳や古典について解説した文章などを教材として学習に取り入れていくようにする。読み比べながら、古典に関する様々な事柄（言葉の意味や仮名遣い等）に触れることに加え、生徒が古典に親しみ、古典への苦手意識を解消することにもつなげていくようにする。

**【文章を読んで正確に理解すること、デジタルで多くの文章を読むことに取り組む】**

③問題文の正確な読み取りを意識させ、「すべての教科で教科書をしっかり読ませる」ことに取り組むようにする。その際、文脈に即した正しい漢字を習得していくことにも注力していくようにする。

④令和７年度以降実施する MEXCBT や、全国学力・学習状況調査の CBT 化に対応するため、「デジタルでの文章の読み書き」を授業時間の中に意図的に設定することで、タブレット端末の有効活用を通して、デジタルリテラシーの向上を図っていくようにする。その際「ナラシドライブラリー」の積極的な活用も促すようにする。

**【話すこと・聞くことの力を高めることに取り組む】**

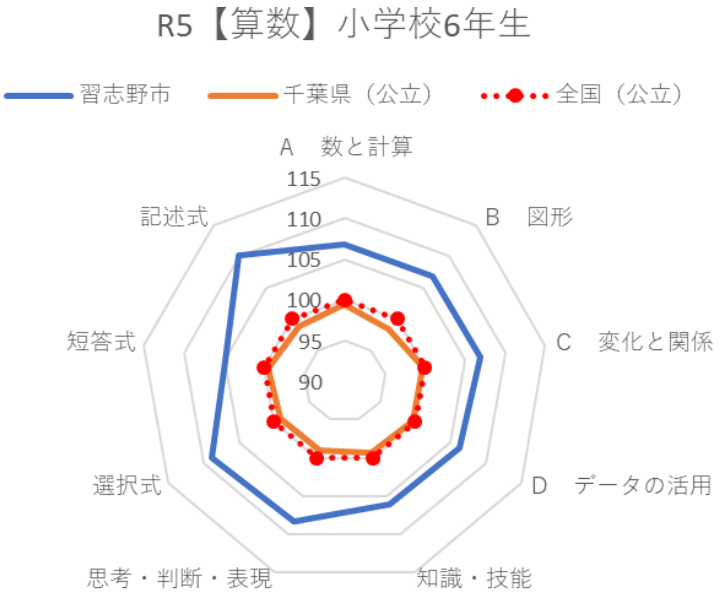
⑤話し方の技能を伸ばすために、スピーチの模範を提示するとともに、伝え合い、聞き合う機会を定期的に設け、相手にどう聞こえるか、伝わるかを実感させていくようにする。その際、課題に対して自分が最も伝えたいことは明確になるよう、スピーチの中心となる事柄をメモしたり、構成の違いによる伝わり方を確認したりする学習を取り入れていくようにする。

（3）小学校・算数

① 正答率

| | 習志野市（%） | 千葉県（%） | 全国（%） | 全国差（%） | 全国1位県（%） |
|---|---|---|---|---|---|
| R5 算数 | 67 | 62 | 62．5 | 4．5 | 67 |
| R4 算数 | 67 | 63 | 63．2 | 3．8 | 69 |
| R3 算数 | 75 | 70 | 70．2 | 4．8 | 74 |
| R2 算数 | | 感染症拡大のため未実施 | | | |
| R1 算数 | 69 | 66 | 66．6 | 2．4 | 72 |

②学習指導要領の内容の平均正答率の状況




全国平均を 100 としたときのグラフ（R5 年度）

③成果と課題、今後の取組

成果①全１６問において、全国・県平均を上回っている。「伴って変わる２つの数量について、表から変化の特徴を読み取り、表の中の知りたい数を求めることができるかどうかをみる」問題の正答率が９５．６％と非常に高かった。また、「百分率であらわされた割合について理解しているかをみる」問題においては、正答率は５４．４％ではあるが、全国平均を８．４％上回っている。

②知識・技能については、普段学習している授業などの中で身に付き、比較的できている点である。

課題①「正三角形の意味や性質について理解しているかどうかをみる」問題の正答率が３１．４％、「高さが等しい三角形について、底辺と面積の関係を基に面積の大小を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるかどうかをみる」問題の正答率が２３．４％と低かった。三角形の図形への理解の低さが見られ、記述式の問題は無解答率が高くないことから、書くことはできているが、内容に沿った文章を書いて説明することに課題がある。

**今後の取組**

**【図形の意味や性質、面積の求め方の理解の定着を図る】**

①図形を扱う授業の際、定義（例：正三角形は３つの辺の長さが同じ三角形）や性質（例：正三角形の内角は全て等しく 60 度）を確認する場面を設定する。

②図形の性質の理解を深めるために、児童一人一人が具体物や、タブレット端末のアニメーション機能を用いて操作し、思考する場面を設定する。

③タブレット端末の AI 型デジタルドリルを授業や家庭学習等で活用する。その際、単元において必ず解かせる問題を学年ごとに確認し、必須問題として全員が取り組むようにする。

**【式や言葉を用いて適切に表現する力を伸ばす】**

④問題解決の際、児童が自身の言葉で表現した内容を児童相互で確認する場面を設定するとともに、テストやノートチェックの際に丁寧に添削する。

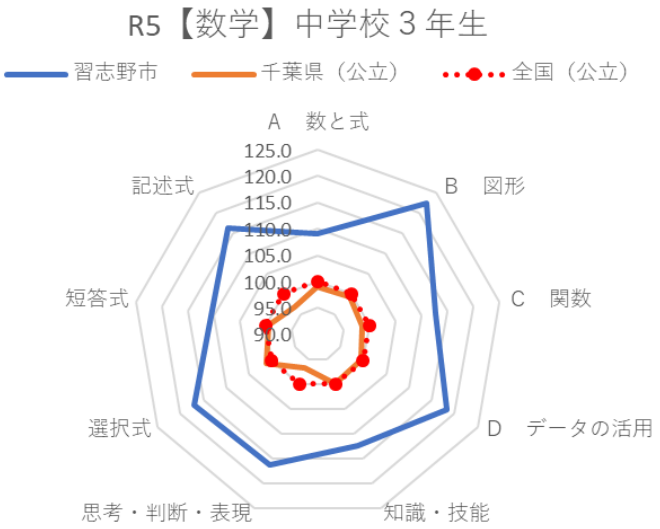
⑤数値を変えた類似の説明問題を使い、解き方の手順を押さえながら解く場面を設定する。

**（4）中学校・数学**

**① 正答率**

| | 習志野市（%） | 千葉県（%） | 全国（%） | 全国差（%） | 全国1位県（%） |
|---|---|---|---|---|---|
| R5 数学 | 58 | 51 | 51．0 | 7．0 | 56 |
| R4 数学 | 56 | 50 | 51．4 | 4．6 | 58 |
| R3 数学 | 60 | 56 | 57．2 | 2．8 | 63 |
| R2 数学 | | **感染症拡大のため未実施** | | | |
| R1 数学 | 60 | 58 | 59．8 | 0．2 | 66 |

**②学習指導要領の内容の平均正答率の状況**




**全国平均を 100 としたときのグラフ（R5 年度）**

**③成果と課題、今後の取組**

**成果**①全体正答率、各評価の観点項目ともに、全国平均をすべて上回っており、１５問中１２問が全国平均を約５～１１%上回っている。昨年度と比較し、伸びが見られる。その中で全国平均を最も上回っているものは、「累積度数の意味を理解しているかをみる」問題であり、その正答率は５７．６％（全国比＋１１．５％）である。

②「はじめの数が１１のとき、はじめの数にかける数が２、たす数が３のときの計算結果を求める」問題の正答率が９１．９％（全国比＋３．０％）と高く、問題場面に

おける考察の対象を明確に捉えることができている。

③「数と整式の乗法の計算ができているかどうかをみる」問題の正答率が８１．７％（全国比＋１．２％）で、基本的な計算能力の定着がみられる。

**課題**①「空間における平面が１つに決まる場合について、正しい記述を選ぶ」問題の正答率が３９．９％（全国比＋９．５％）であり、空間における平面が同一直線上にない３点で決定されることの理解が課題のある点である。

②「２つの直線ＢＣと直線ＡＥが平行であることを三角形の合同を基にして、同位角又は錯角が等しいことを示すことで証明する」問題の正答率が３８．０％、無回答率が１９．０％（全国比－５．７％）であり、ある事柄が成り立つことを構想（どのような要素を用いてどのように事柄の仮定と結論を結びつけるかを探る営み）に基づいて証明することが課題のある点である。

**今後の取組**

**【平面図形や空間図形の意味や性質の理解の定着を図る】**

①紙面では理解が難しい空間図形について、タブレット端末の空間図形のシミュレーション等を使って、立体的に捉えることで理解を深める。平面図形においても図形を動かすことで理解を深める（例：動点問題）ことができることからタブレット端末を利用する場面を設ける。

**【証明をする際の構想を立てる力を高める】**

②同種の証明問題を繰り返し記述する場面を設定することで、証明の基本的な記述方法（手順や決まり）の定着を図る。

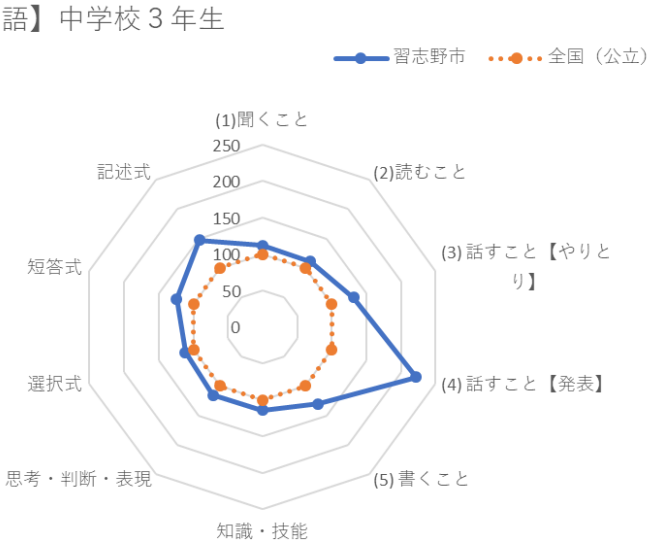
③証明を記述し始める前に、その問題の証明の構想を確認する場面を授業内に設ける。

**（5）中学校・英語**

**① 正答率**

| | 習志野市（%） | 千葉県（%） | 全国（%） | 全国差（%） | 全国1位県（%） |
|---|---|---|---|---|---|
| R5 英語 | 52 | 46 | 45．6 | 6．4 | 52 |
| R2～4 英語 | | 実 | 施 | な | し |
| R1 英語 | 58．0 | 56．0 | 56．0 | 2．0 | 59 |

**②学習指導要領の内容の平均正答率の状況**




**全国平均を 100 としたときのグラフ（R5 年度）**

**③成果と課題、今後の取組**

**成果**①聞くことに関する設問の正答率が高く、特に「ある状況を描写する英語を聞き、その内容を最も適切に表している絵を選択する」問題の正答率が８６．４％と高いことから、情報を正確に聞き取る力が身に付いているとわかる。

②無解答がほとんどないことから解答への意欲があり、選択式の問題の正答率は平均して高い。

**課題**①「ロボットについて書かれた英文を読み、書き手の意見に対する自分の考えとその理由を書く」問題の正答率が２８．８％と低く、無回答率が２３．６％と高い。社会的な話題に関して読んだことについて、自分の考えとその理由を書くことに課題がある。

②「与えられた英語を適切な形に変えたり、不足している話を補ったりして、会話が成り立つように英文を完成させる」問題の正答率が２６．７％と低く、疑問詞を用いた一般動詞の二人称単数過去形の疑問文を正確に書くことに課題がある。

③「話すこと」の全国平均との比較は２倍の差がついているが、正答率でみると【やりとり】１９．０％、【発表】９．３％と非常に低い。

**今後の取組**

**【英文を正しく書くことを高めるために】**

①英単語の知識や、文構造の基礎基本の定着を図る場面や、内容を考えながら英文を読んだり書いたりする場面を授業の中に意図的に設定していく。

②ＩＣＴを活用してさまざまな場面や資料を提示し、生徒にそこから得た情報や自分の考えを語数等の条件に応じて表現させる活動を取り入れる。

③会話によるコミュニケーション活動から、その内容を書いてまとめるまでの活動を授業の中に設定し、自分の言葉で書く力を伸ばしていく。

**【「話すこと」の力を高めるために】**

④学習や経験で蓄積した英語での話す力・聞く力を駆使して、質問したり答えたりする場面を設定し、即興で伝え合う経験をさせていく。その際、ＡＬＴの支援やタブレット端末の活用を取り入れる。

⑤会話活動の前に英単語の発音や場面に応じた表現を確認するなどして、生徒が自信をもって英語を話せるようにする。

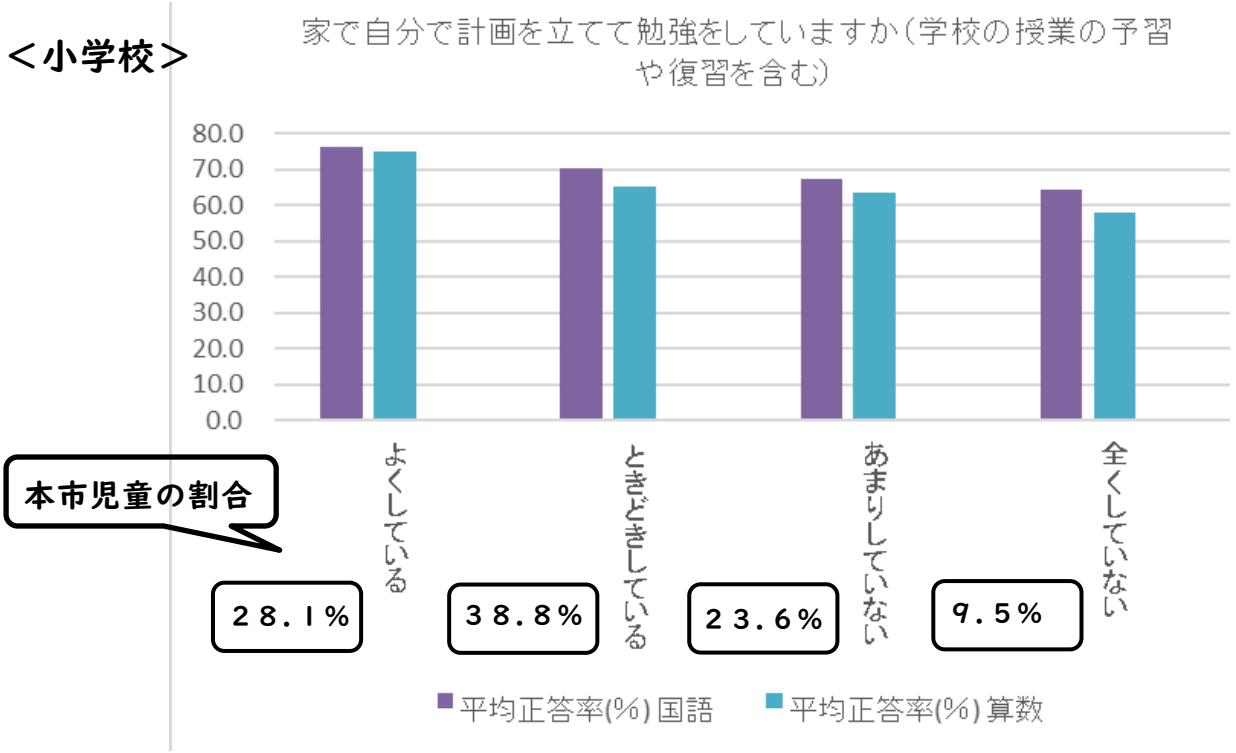
**習志野市は全国、県の平均正答率を小・中学校ともに全教科で上回り**
**全国1位の都道府県と比較しても同レベルであるといえる**

## ６ 児童生徒質問紙調査の回答結果と教科に関する調査の正答率との相関関係

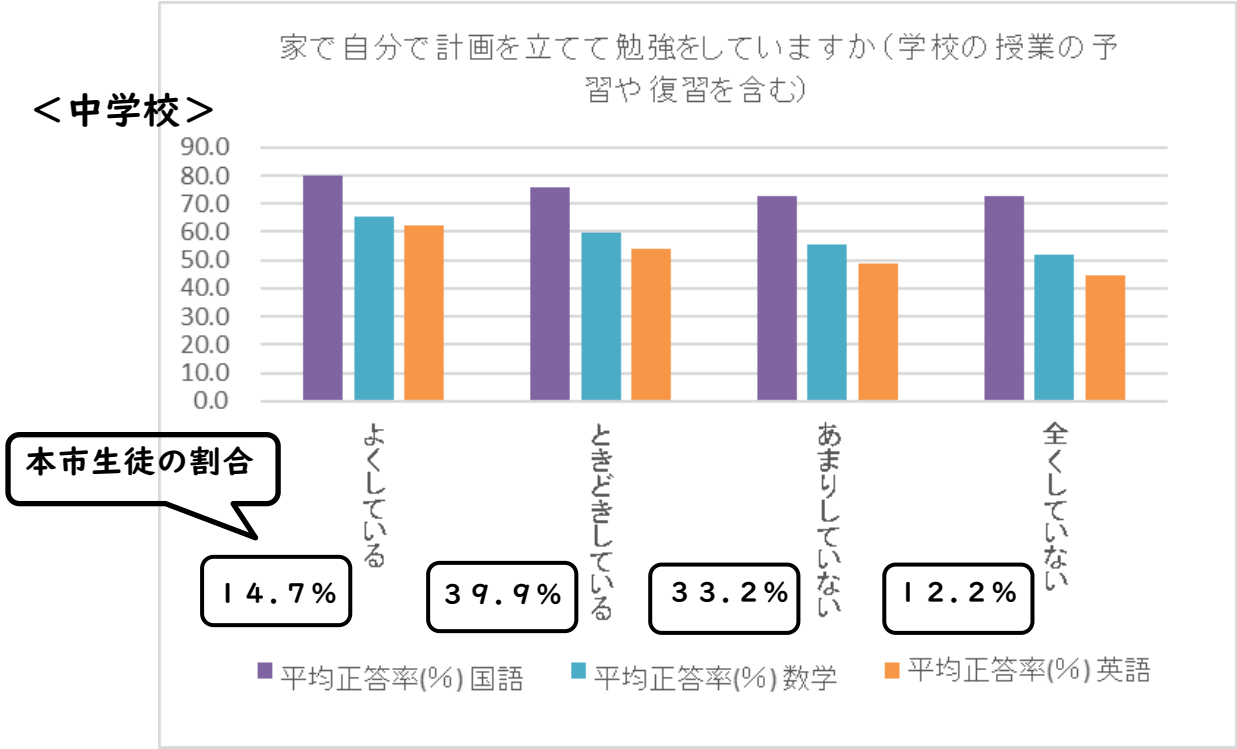
※質問事項に対する児童の回答（選択肢）と、教科に関する調査の正答率との関係を棒グラフで示しています。

Q: 家で自分で計画を立てて勉強をしていますか（学校の授業の予習や復習を含む）

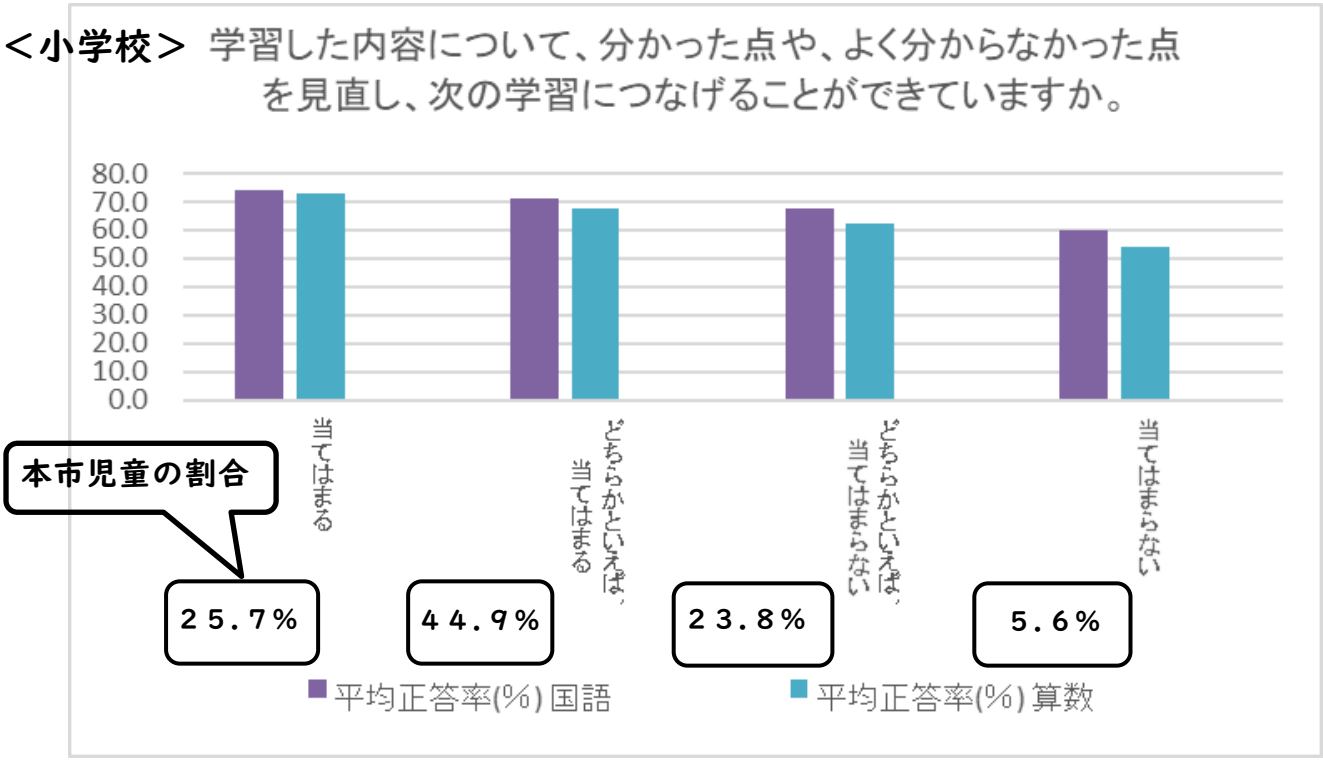
＜小学校＞

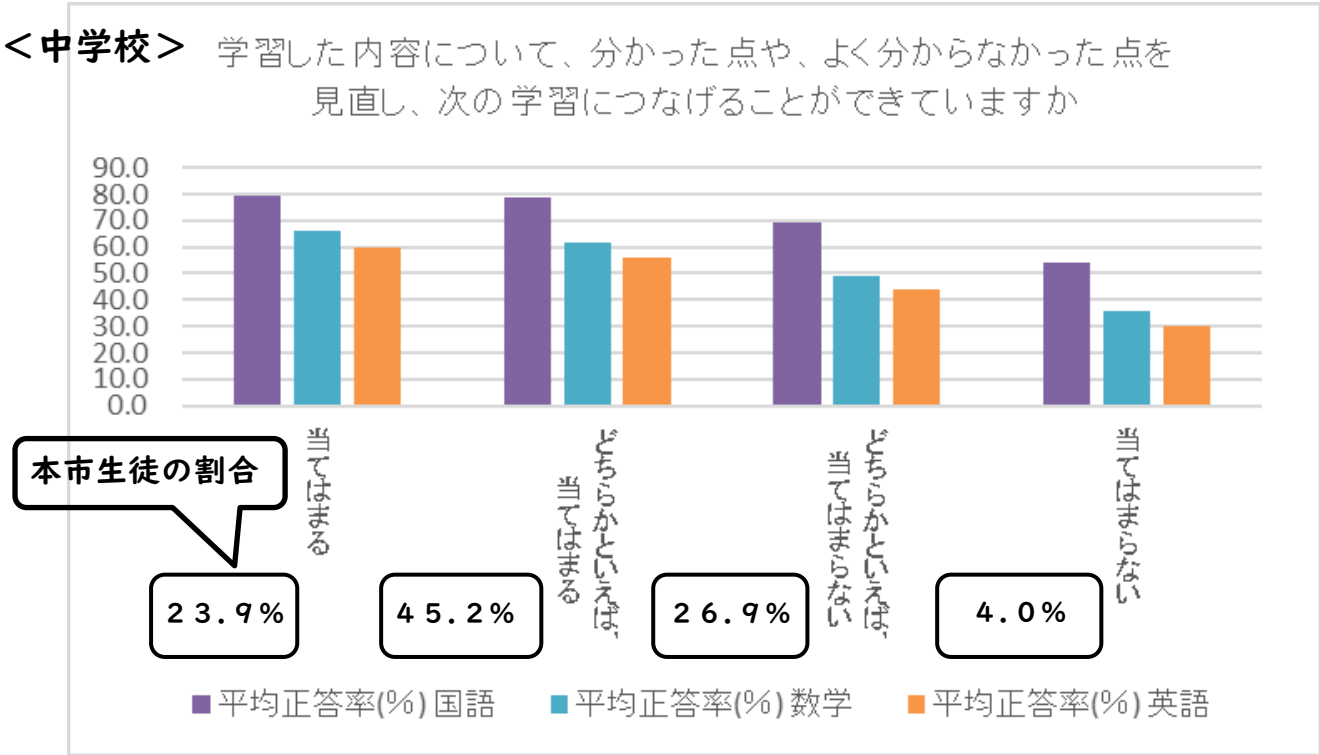



＜中学校＞



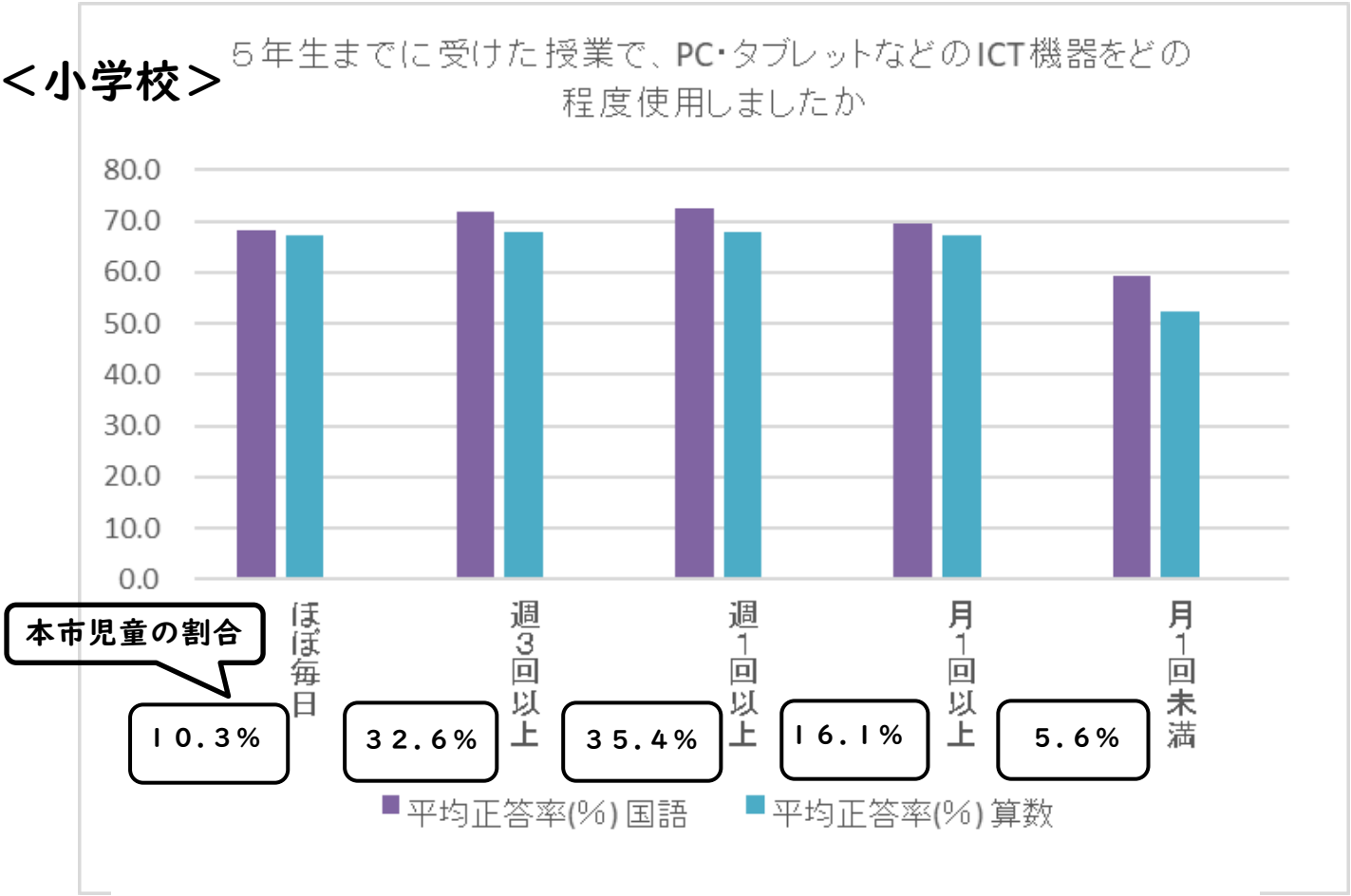
Q: 学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか



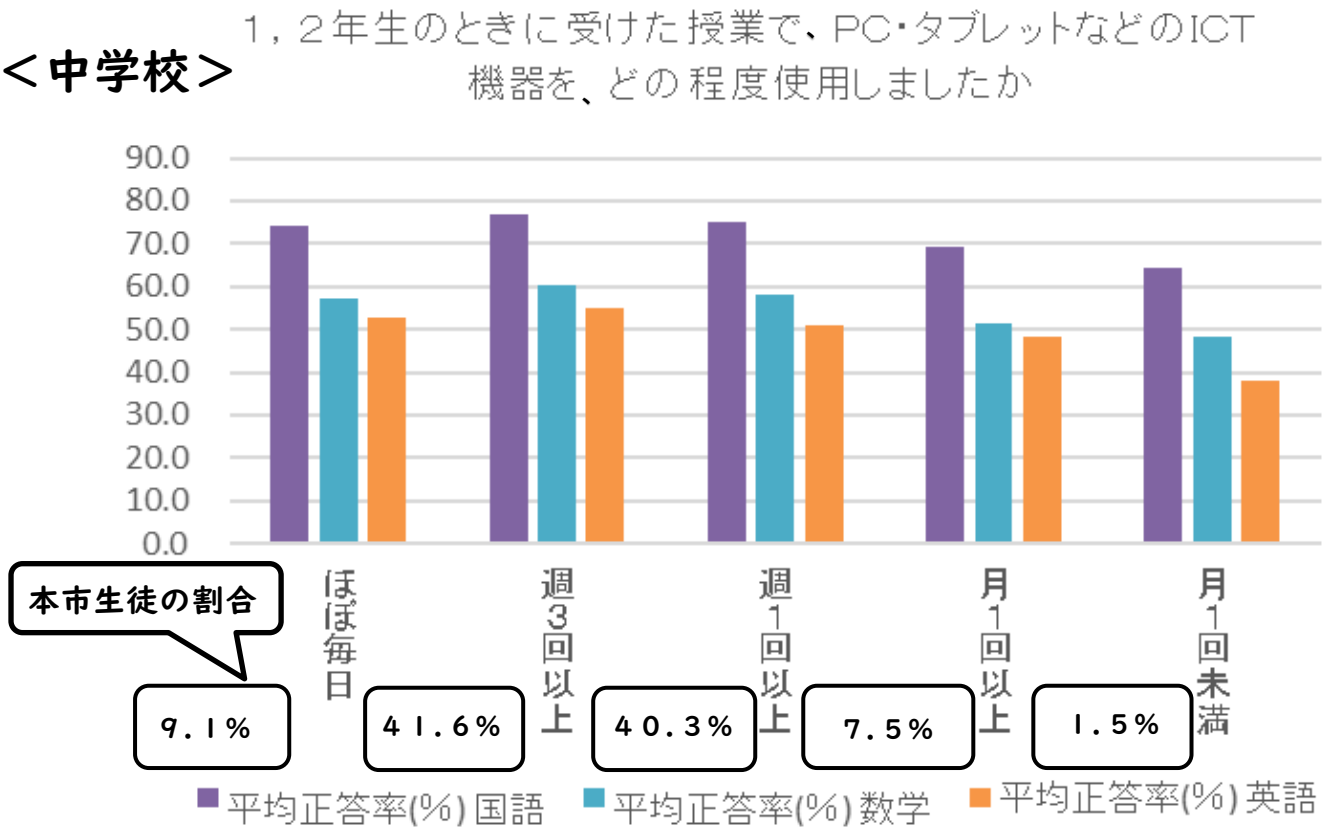



## 7 ICT の活用に関する児童生徒質問紙調査の分析

＜小学校＞




＜中学校＞



## ８ 調査結果についての考察

**＜児童生徒質問紙調査の回答結果と教科に関する調査の正答率との相関関係から＞**

| |
|---|
| Ｑ 家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか（学校の授業の予習や復習を含む） |
| Ｑ 学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか |

家庭において自分で計画を立てて勉強をする方が、正答率が高い傾向にあり、家庭学習が習慣化されている児童生徒ほど比較的正答率が高いことが分かる。児童生徒の割合をみると、小学校で「よくしている」と答えた児童は２８．１％、生徒は１４．７％と、中学校の方が計画を立てて勉強していると答えた割合が少なく、一方、「全くしていない」と答えた児童が９．５％、生徒は１２．２％と中学校の方が計画を立てて勉強していないと答えた割合が多くなっている。この原因については、今後、分析を進め明らかにしていく。

また、学習した内容について、分かった点やよく分からなかった点を見直し（学習の振り返り）、次の学習につなげることができている児童生徒ほど、平均正答率が高い傾向にあり、進んで学ぶ姿勢を持っている児童生徒の学習の正答率が高いといえる。一方で、小学校と中学校共に「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」と答えた割合の合計が約３０％と伸びが見られない点においては、習慣化の固定化への影響が考えられるが、この原因については、今後、分析を進め明らかにしていく。

**＜ICT の活用に関する児童生徒質問紙調査の分析から＞**

| |
|---|
| Ｑ （小）5年生までに、（中）1・2年生の時に受けた授業で PC・タブレット端末等の機器をどの程度使用したか |

タブレット端末導入当初の令和３、４年度は、教員の授業でのタブレット活用について取り組んできた。令和５年度は児童生徒の授業での積極的な有効利活用を意識し、授業に取り組むよう周知してきた。

今年度は、週１回以上使用していた児童生徒の平均正答率は比較的高くなっており、今後も、児童生徒にとって必要感のあるタブレット端末の効果的な利活用を意識して、その方法を周知し、積極的活用を推奨していく。

ICT の活用に関しては、ICT マイスター制度等を利用して、タブレット端末の授業での活用について校内研修等を実施したり、これまで効果のあった ICT 学習指導員、ICT 支援員の活用を推進したりするなど、教員の ICT 活用、指導力の向上に努めていく。